

明治期高知における日中文人の交流

——画家胡鉄梅を中心として

柴田清繼
蔣海波

はじめに

明治四年に日清間の修好条規が調印されて以来、清国人が日本に渡航することが可能となり、日本国内で清国人と日本人との間で漢詩の唱酬等の交流が盛んに行われるようになった。そのような交流が最も盛んに行われたのは、言うまでもなく首都の東京、次いで京阪神地方であったが、そうした動きは次第に全国各地に及んでいったことが、当時のさまざまな資料を通して知られる。

我々はここ数年、主として神戸を中心とする地域における日中人間の文藝交流について研究し、その成果を発表してきたのであるが、今回は神戸を經由して、あるいは神戸在住の人々とのつながりを背景として高知を訪れた清国人と、地元高知の詩人たちとの間の詩文交流に着目し、その交流の実態について、これまでに明らかにすることのできた事柄をまとめてみることにしたい。

高知を訪れて地元の詩人と交流した清国人とは、明治十八年の胡鉄梅（一八四八～一八九九）、同十九年の王治本（一八三五～一九〇八）、同二十年から二十一年にかけての馬仿周（一八五五ごろ

？）、同三十二年から三十三年にかけての王照（一八五九～一九三三又は一九三五）等である。この方面の研究成果としては既に中村忠行氏の「胡鉄梅」札記―清末の一畫家と土佐の詩人達―がある。この論文は標題に掲げた胡鉄梅について、その来日の時期、日本における足跡等も含めて考証するとともに、さらに王治本や馬仿周の高知での活動にも言及した、きわめて詳細な内容のものである。我々はこの中村氏の学恩に浴しつつ研究を發展させてきたのであるが、ただ、中村氏は当時の高知の地元新聞に掲載された漢詩文資料に目を通された形跡がなく、また、そのあまりにも該博な知識と知見が却って災いしたものか、清国人それぞれに関する事柄の叙述がやや錯綜してしまっている嫌いなしとしない。

そこで、我々は中村氏が目撃しておられないと思われる新聞資料等も援用し、かつ胡・王（治本）・馬・王（照）の四者をできるだけ分けて、その活動の実態に迫ってみたいと思うのであるが、本稿はその第一報として胡鉄梅を取り上げることにする。

最初に明治十八年の胡鉄梅の訪問以前の高知の地元紙に見られる日中詩人の交流について紹介し、これを前史として、本題の胡鉄梅

の一件に入っていくこととしたい。

一 明治期高知における日中詩文交流前史

明治期の日本の新聞には「雜録」等と称するコーナーに地元の詩人のもを中心として、漢詩文作品の掲載されるのが一般であった。当時の高知で発行されていた新聞もその例に漏れぬものであり、それらの作品の中に明治十五年から十六年にかけての日中詩文交流の跡を窺うことができる。その一つは田中璞堂（一八三一—一九〇八）と王治本との交流、もう一つは国分金峽（一八五七—一九四四）と陳曼寿との交流である。

璞堂の伝記的事項については中村氏の説明を参照されたい。王治本は泰（漆）園と号し、明治十年に来日し、途中何度か故郷の浙江慈溪への帰省を挟みつつ、長らく日本に滞在し、明治の終わりがろ長崎で客死したと言われる、きわめてユニークな文人である。彼ら二人の交流の跡が『高陽新報』紙上の三箇所に見出される。そのうちの二つは泰園の評を付して掲載された、十五年六月二十九日号の「廉將軍歌」と、十六年八月二十五日号の「一燈」及び「新雁」の兩詩である。後の一つは同紙十六年四月十四日号掲載の璞堂の「奉寄泰園王先生」詩と、これに対する泰園の次韻の作と、さらにこれに対する璞堂の次韻の作の計三首である。

彼らの交流の始まりは遅くとも、璞堂が東京に滞在していた明治十三年ごろまでさかのぼる。なぜならば、明治十九年彼が王治本を高知に迎えたときの「王泰園詞宗過訪、欣然賦謝」詩に「京城の贈答 太だ纏綿たり、指を屈すれば忽忽として六年過ぎたり」の句が

あるからである。中村氏もこの詩句を根拠として「明治十三・十四年（一八八〇—一八八一）頃」を璞堂の上京年次と見ておられる。

ただ、中村氏が璞堂は竹馬の友たる山本弘堂（一八三四—一九〇七）の江戸「下谷吟社」への出入に刺激され、「発奮して上京、勉学する傍ら森春壽の『茉莉吟社』や王泰園の『聞香社』に出入して、詩を学んだらしい」と述べておられるのには、根拠が示されていない。

いずれにせよ、璞堂の次韻の作の領聯で王治本の容貌を「絳帳青氈 先覺の士、瘦肩斑鬢 旧書生」と表現しているのを見ると、このとき既に面識のあったことが分かる。してみると、この三首は明治十三年ごろ、二人の交流の始まった当初のものとするのが自然なように思われる。詩句により、二人の交流の様子を窺ってみると、次のようなことになる。すなわち、まず璞堂から泰園への第一首の冒頭に「一たび巴辭 定評に入りしより、神魂日夜幾回か驚きぬる」とあるのにより、泰園が撰者を務める等何らかの形で関与していた詩文誌、もしくは漢詩欄をもつ新聞に璞堂が自作を投稿し、入選したという事があったと推測される。「巴辭」は「巴人下里」の故事（梁簡文帝「与湘東王書」を踏まえ、自作を謙遜した表現と考ええてよからう。さて、これに対する泰園の次韻の作「次韵奉贈田中道契先生」の首聯によれば、璞堂の作は「十首の琳琅」で、泰園は「清辞麗句 人をして驚かしむ」と評している。これをきっかけにして、璞堂は「王氏 余より少きこと三年」（第一首原注）であるにもかかわらず、「願わくは吾が道を持て堂室を窺い、弟子行中 名を列ぬるを得んことを」（第一首尾聯）と願ひ出たのに対し、泰園は次韻の作の尾聯で「良縁定めし前生の結べる有らん。識るを得たり

扶桑高士の名」と受け止めている。これを承けた璞堂の第二首「再用前韻奉答」では、首聯で「屢しば君が手を煩わして新評を得たり、我に投ぜざる佳篇 吟じ且つ驚く」と詠んで、泰園から贈られた佳篇に敬服し、泰園を師匠として「桃李 春風 天下に遍し。曷ぞ唯に東海に声名を擅にするのみならんや」とたたえて結んでいる。

もう一つの交流の事例の国分金峽(名高胤)は、むしろ青厓の号で知られる詩人である。仙台の人であるが、明治十七年以前の第一期、大阪の『大東日報』を経て、高知の『高陽新報』の記者を務めていた。陳曼寿は、名は鴻誥、字は味梅、曼寿はその号である。明治十三年に來日し、十五年六月に帰国したが、その間、同時代の日本の漢詩人六十二人の作品五百九十九首を収録した『日本同人詩選』(明治十六年四月)を編んだことで知られている。同紙の十六年三月十七日号に金峽の「游巖島」「登彌山(即巖島絶頂)」の二詩及び陳曼寿の評が、また、七月十九日号には金峽の「登樂波山」詩及び陳曼寿の評が載っているが、詩に詠まれている場所、及び彼ら二人の経歴から考えて、いずれも金峽の高知着任以前の作と考えられる。

また、同紙十六年三月二十三日号には、陳曼寿「奉呈松洲(金峽別号)詞宗兼索和」と金峽懶樵「次曼寿詞伯見贈韵奉答」という二人の唱酬の作が載っているが、その詩句の内容からして、これも高知における交流の産物とは考えにくい。

二 胡鉄梅と高知文人の交流

(1) 胡鉄梅の高知訪問の経緯 さて、いよいよ本題の胡鉄梅で

あるが、鉄梅は字で、その名は璋、安徽桐城の人。山水・人物・花卉に巧みなことで知られた画家である。また、明治二十九年上海で『蘇報』を創刊したことで知られている。中村氏は胡鉄梅の來日後、高知訪問に至るまでの経緯について詳しい考証をし、当時「我国に居留する外国人に対しては『遊歩規定』なるものがあり、特別に許可された者以外は、居留地外に住むことが許されず、国内旅行には許可証を入手する必要のあったことを説明してくださっていない。我々としては、これに付け加えることのできる事柄はほとんどないが、次の二件の一連の外務省資料(東字第參拾柒号)は中村氏も言及しておられないので、掲げておくことにする。

明治十八年五月

清国文士胡玉璋王泰園三カ年ヲ期シ日本全境遊歴ノ旅行免状請
求一件 拒絶

明治十八年六月

清国公使館付学生王治本胡鉄梅へ内地旅行免状付与ノ件

啓者茲有本大臣署中学生王治本胡鉄梅二人欲往貴国山陽道山陰道西海道南海道各処遊歴往返約以一年為期応請貴外務卿各給旅行票一枚共計兩紙並望在票上註明一年期限及貴境各処地方字樣以便該学生等隨時隨地可以出遊不致阻滯實深感幸此布即頌日祉
光緒十一年四月三十日 明治十八年六月十二日

欽差大臣徐承祖

外務卿井上馨閣下

これによると、明治十八年五月、胡璋（璋は本名。玉章は璋を誤ったものだろう）は王治本ともども、三カ年にわたる日本全域遊歴の旅行免状を申請したものの、拒絶された。これが個人で行った申請であったか、それとも身元引受人を通じての申請であったかは不明であるが、その後まもなく今度は欽差大臣、すなわち時の在日本清国理事府正使徐承祖の名義で二人の山陽・山陰・西海・南海の各道への一年間の遊歴のための旅行票の交付が申請され、許可されている。二人の身分が五月の申請では「清国文士」となっていたのが、六月のそれでは「本大臣署中の学生」とされたのも、効き目があったのかもしれない。

さて、胡鉄梅が南海道の高知に入った時期は十八年の七月二十八日以前のことであった。それは高知の地元紙『弥生新聞』の十八年七月二十八日号から八月一日号にかけて、「清国有名ノ墨客（改行）胡鉄梅先生来県ス（改行）右先生ノ揮毫○詩文添削○古人墨蹟審定等乞フ雅客ノ紹介可仕候間御來談アレ（改行）西弘小路 南国社」という広告が掲載されていることよって知られる。これは後で見ると八月二十五日執筆の璞堂の「長笛一声樓詩集序」に、胡鉄梅が高知に来てから「幾ど將に月に匪からんとす」と述べられているのとも見合うことである。

ところで、中村氏は「高知は胡鉄梅にとつて不案内の土地であるから、何人か紹介する人があったに相違ない。が、誰が誰に紹介したのかは、審らかではない。しかし、何れにせよ、紹介を受けた人が、田中璞堂・三浦一竿・宮地逸齋三兄弟の中の一人であるか、その周辺に在った人であらうことは、想像に難くない」と述べておられる。この件については、上記の申請が王治本と連名になっている

ことからして、胡・王の間に既に付き合ひがあったと考えられるから、王治本が胡鉄梅を璞堂に紹介したと見るのが自然だろう。

(2) 邂逅 さて、『弥生新聞』には、その八月七日号から十月十六日号にかけて断続的に、高知の詩人たちと胡鉄梅とが唱酬した詩文が載っている。掲載の順序は必ずしも詠まれた順序を表すものとはなっていないので、できるだけ時系列に則して整理し、以下彼我詩文交流の様子を窺ってみようと思う。

田中璞堂と三浦一竿の兄弟が胡鉄梅にそれぞれ贈呈した左記の三首（八月七日号掲載）が、最も早い時期のものだろうと思われる。一竿（一八三四〜一九〇〇）の伝記的事項については中村氏の説明を参照されたい。^{（注13）}

呈大清鏡梅胡先生侍側以供一祭二首 璞堂田中正

妙手由来不覓工 妙手は由来 工を覓めず

毫端只要得神通 毫端只 神通を得んことを要するのみ

海南山水何多幸 海南の山水 何ぞ多幸なる

渾入高人意匠中 渾て高人の意匠の中に入る

独歩声名我已聞 独歩の声名 我已に聞けり

今看紙々落烟雲 今看る 紙々 烟雲落つるを

心腸鏡石尤清絶 心腸鏡石 尤も清絶に

筆底梅花即是君 筆底の梅花 即ち是れ君なり

贈胡鉄梅先生 一竿三浦

遠伝名字到天涯 遠く名字を伝えて天涯に到らしめ

筆力精神作一家 筆力精神 一家を作す

惟有寒梅同品格 惟寒梅の品格を同じくする有るのみ

満村風雪自開花 満村の風雪 自ら花を開く

三首の内容を合わせて想像するに、胡鉄梅が瓊堂・一竿兄弟の前
で梅花（寒梅）をモチーフとする画を揮毫して見せたもののように
ある。

次は陰曆六月念九、すなわち陽曆の八月九日に細川錦浦が小松氏
の招宴で詠んだ左記の作（九月十二日号掲載）である。錦浦の伝記
的事項については中村氏の説明を参照されたい。宴を催した小松氏
については、翌十九年の王治本との交流にも登場する小松修道（名
盛政。一八三四〜一九〇九）のことではないかと思われる。「外科
および産科の名医として評判が高かつた」人物である。

陰曆六月念九、邂逅胡鉄梅雅君於小松氏席上、賦呈、閑苦
炎暑 細川錦浦

偶爾相逢興味長 偶爾相逢いて 興味長し
忽驚筆勢藻葩芳 忽ち驚く 筆勢 藻葩芳しきに
海南暑氣君休厭 海南の暑氣 君 厭う休かれ
将起秋風颯々涼 将に秋風起ち 颯々として涼しからんとす

これには胡鉄梅の「随意に書き来りて、水到りて渠を成すの妙有
り」との評が付せられている。

(3) 松鶴楼にて 七夕前夜と七夕当日、すなわち陽曆の八月十

五・十六の両日は、田中瓊堂・三浦一竿・宮地逸斎の三兄弟と橋本
独醉・細川錦浦の二人が、稲荷新地（現若松町）にあった、民権派
がよく懇親会に利用したことで有名な料亭「松鶴楼」で、胡鉄梅と
その愛妾を饒行する会を開いている。その際の詩を左に掲げる。宮
地逸斎（一八四七〜一九一八）の伝記的事項については中村氏の説
明を参照されたい。橋本独醉は名を寛、字を子厚といい、独醉はその
号である。胡鉄梅の愛妾とは、かの生駒悦（一八七六〜一九九九）
のことかとも思われるが、未詳である。

七日前夕、独醉・錦浦二友、与余兄弟三人、同饒胡鉄梅
雅契於松鶴楼上、鉄梅携愛妾、句中故及 瓊堂

一道銀河界碧天 一道の銀河 碧天を界し

彎々月上水如烟 彎々たる月上 水 烟の如し

帝郷雲錦文章在 帝郷雲錦 文章在り

遇此牽牛織女縁 此の牽牛織女の縁に遇いぬ

遠説離愁七夕前 遠かに離愁を説く 七夕の前
相逢談笑復何年 相逢いて談笑するは復た何れの年ぞ
双星同渡銀河去 双星（牽牛と織女）同に銀河を渡りて去り
不管參商各一天 管せず 參商各おの一天なるに（八月二十
一日号掲載）

第二首の第一句によれば、胡鉄梅は八月十五日の時点で既に、高
知を去る気持ちを表示していたことになるが、実際はその滞在はま

だしばらく続いた。この日のもう一首は錦浦の作（九月十二日号掲載）である。

全七月六日夕、饒胡鉄梅君於松鶴樓、賦此呈 細川錦浦

飛帆 浪を截ちて 南州に向かう

何料今般共好遊 何ぞ料らん 今般 好遊を共にせんとは

鵲影浮橋半江夕 鵲影 橋を浮かす 半江の夕べ

虫声調瑟一天秋 虫声 瑟を調ぶ 一天の秋

丹青淡雅王家妙 丹青 淡雅なるは 王家の妙

藻思雄渾杜氏流 藻思 雄渾なるは 杜氏の流

新識情懷猶旧識 新識も 情懷 猶旧識のごとし

却愁別後又風牛 却つて愁う 別後 又風牛ならんかと

これには胡鉄梅の「筆に信せて書き来り 人有り景有り。王右丞（丞）の『詩中に画有り』は、君に於いて之を信ぜり」という評がある。王維流の「詩中の画」の趣はあなたにこそ当てはまるものと返しているわけである。

十六日の作としては一竿の「乙酉七夕、細川錦浦・橋本独酔、及余兄弟三人、饒胡鉄梅先生於松鶴樓、賦此以贈」と「又戯作（鉄梅有愛妾同●故及之）」（いずれも九月十三日号掲載）の二首が残っている。後者だけ詩句を掲げておこう。

又戯作（鉄梅有愛妾同●故及之） 一竿

鳥鵲橋頭捲晚烟 鳥鵲橋頭 晚烟捲き

銀河万頃水横天 銀河万頃 水 天に横たわる

人間別有双星路 人間 別に双星の路有り
今夕佳期不隔年 今夕の佳期 年を隔てじ

七夕の翌日の十七日には胡鉄梅が璩堂の詩意（十五日の二首のそれか）を画で表現し、左記の二絶句（八月二十八日号掲載）を詠んで、璩堂に贈っている。

乙酉七夕、承田中璩堂君及諸賢、開盛筵於松鶴樓、招余共賞良宵、並為余餞行、璩堂即席賦詩二章記興、翌日余写図、並口占二絶、録呈雅正 清国胡鉄梅

把酒開襟意快哉 酒を把り襟を開きて 意快きかな

半珪新月照樓台 半珪の新月 樓台を照らす

姮娥笑我謀生拙 姮娥 我が生を謀るの拙きを笑い

今夜天孫送巧来 今夜 天孫（織女星） 巧を送り来る

一年一度意如何 一年一度 意如何

惹得年々離恨多 惹き得たり 年々離恨多きを

儂却不知天上事 儂は却つて天上の事を知らず

人間滄海即銀河 人間の滄海こそ即ち銀河なれ

七夕の宴の際、璩堂は胡鉄梅の詩集を見せられたようで、それに対する感想ともども、この二首に対する評を述べている。詩集とは、後で触れることになる『長笛一声樓詩集』を言うものと見られる。さて、璩堂の評は「余 昨 胡君の集を借觀せり。其の詩は杜少陵に学び、或いは梅村に似、或いは船山に似たり。今 此の二詩を讀

むに、蓋し意を留めざるの作ならん。而るに所謂天籟の響きは、的らかに是れ天孫 巧を送り来る処にして、其の妙には後輩の企及せざる所有り。余が前日の作は、頗る戯言に似たり。愧謝々々」といふものである（梅村と船山は、それぞれいづれも清代の呉偉業と張問陶）が、ややほめすぎの感もあるのではなからうか。

(4) 寓齋を訪れて 次は八月二十一日号掲載の璞堂の作で、左記のとおりである。

訪胡鉄梅雅契、觀其書画、且話詩、鉄梅爲余揮毫數幅、三歎之餘、賦此以贈 田中璞堂

董家妙画冠前明 董家（董其相）の妙画は 前明に冠たり

遺意相伝う 三世の名

運腕は今 李北海（唐の李邕）を宗とし

撥鐙（ほつてつ）曾学顔真卿 撥鐙は曾で顔真卿を学びぬ

水流蕩漾山愈静 水流蕩漾として 山愈いよ静かに

花気芬菲鳥欲鳴 花気芬菲として 鳥鳴かんと欲す

數幅賞來看不倦 數幅賞し來り 見て倦まず

陰壇且喜結新盟 陰壇且く喜ぶ 新盟を結ぶを

「訪」とあるから、璞堂が胡鉄梅の宿舎を訪れたものであろうが、その宿泊先は『高城唱玉二編集』に胡鉄梅の「題延命軒」という詩が載っていることからして、延命軒であったものと考えられる。延命軒は、『弥生新聞』十八年八月九日号の広告欄に「開業広告 一和洋御料理 一 会席御料理 一 旅亭 弊舗儀從來新京橋盛山亭

ト相唱へ和洋食肉店相當候処諸君之御鼻負ヲ以テ日増ニ繁盛ニ相移候段難有奉存候然ルニ盛山亭ハ手狭ニモ有之自然御客様ニ対シ失敬之御扱ニモ及ビ折角之御厚意ニ悖キ甚本意ニ御座候間今般更ニ帶屋町上壺丁目ニ支店延命軒ヲ相開前書之通御好ニ随ヒ調進上仕間旧ニ倍シ御愛顧之程奉希可候 十八年八月 延命軒主人敬白」とあるとおり、開店後間もない料亭兼旅亭で、やや後の事になるが、高知出身の寺田寅彦（一八七八—一九三五）が明治二十七、八年ごろの高知で「一等の旅館」だったと記している所である。

なお、領聯はこのとき贈られた画の構図を璞堂が詩句で表現したものと見られるが、胡鉄梅が高知で描いて残した画については、後でまとめて触れることにしたい。

さて、この年の中元の八月二十四日、既望の二十五日、さらにその次の二十六日の三日間も璞堂らは胡鉄梅と面会している。二十四日は胡鉄梅の招飲に応じたもので、璞堂の「乙酉中元、余兄弟三人、承胡鉄梅君、招飲賞月」（九月五日号掲載）と一竿の「乙酉中元、余兄弟三人、承胡鉄梅先生、招飲賞月」（九月十三日号掲載）の二首が残っている。二十五日も三兄弟が胡鉄梅の寓齋を訪れ、このときの作もやはり璞堂の「既望夕余兄弟三人復訪胡君寓齋」（九月五日号掲載）と一竿の「乙酉七月既望訪胡鉄梅先生寓齋賞月」（九月十三日号掲載）が残っているが、この日の璞堂の作として「長笛一声樓詩集序」と題する左記の文章も残っている（九月五日号掲載）。

胡君鉄梅、清国池州人、累世以書画名家、克承家学、尋幽探勝、客我日本、於茲五載。君書画超妙、独歩一時、片楮尺縑、人爭求之。然書学顔平原、兼李陳州、画学董思翁、兼王耕煙。皆由

天資而臻学力。殊不知其詩尤佳。格律精細、得自杜少陵、高秀神似吳梅邨、奇肆酷肖張船山、●可稱三絕矣。乙酉季夏、奉其使節之命、觀風西南四道、特來土佐。余幸得接轡（轡）效焉、朝夕過訪寓齋、乞君之書畫、則見其解衣磅礴（礴）、揮洒自如。臨池之暇、談詩煮茗、幾將匝月。頃因錄近作、欲付手民、乃請得誦是篇。一唱三嘆、不能自已（已）。余慕君之為人、清才実学、磊落不羣。復愛君之詩。不啻嗜君之書畫者。而君之才藝、豈止書畫而已哉。余雖不文、豈可不贅一言、以告諸好事。况感我知己（己）之情乎。遂書以贈。明治十八年乙酉中元後一日 日本土佐隱士環堂田中正拜序

■胡君鉄梅は清国池州（安徽省に属す）の人、累世 書画の名家を以て、克く家学を承け、幽を尋ね勝を探り、我が日本に客たること茲に於いて五載。君は書画超妙にして、一時に独歩し、片楮尺縑も、人争いて之を求む。然れども書は顔平原（唐の顔真卿）を学びて、李陳州を兼ね、画は董思翁（明の董其昌と清の呉叔元、号思翁の両者を混同したか）を学びて、王耕煙（清の王翬、号耕煙）を兼ね。皆天資に由りて学力を臻む。殊に知らず 其の詩尤も佳きを。格律の精細なるは、杜少陵より得、高秀なるは吳梅邨に神似し、奇肆なるは張船山に酷肖し、●三絶と称す可し。乙酉の季夏、其の使節の命を奉じ、風を西南四道に觀んとして、特に土佐に来る。余幸いに轡效に接するを得、朝夕寓齋を過訪し、君の書画を乞うに、則ち其の衣を解きて磅礴たり、揮洒すること自如なるを見る。臨池の暇、詩を談じ茗を煮て、幾ど將に月に匝からんとす。頃因りて近作を録して、手民に付せんと欲し、乃ち請いて是の篇を読むことを得たり。

一唱三嘆、自ら已む能わず。余 君の人となり、清才実学、磊落にして羣せざるを慕う。復た君の詩を愛す。畜に君の書画を嗜むのみなる者にあらず。而して君の才藝は、豈書画に止まるのみならんや。余は不文と雖も、豈一言を贅し、以てこれを好事に告げざる可けんや。况や我が知己の情に感ずるをや。遂に書して以て贈る。明治十八年乙酉中元後一日 日本土佐隱士環堂田中正拜序

中村氏は胡鉄梅の来日の時期を考証して「明治十三年（一八八〇）を遡るものではあるまい」と推測されたが、この序の「客我日本、於茲五載」の二句はその傍証となるものである。また、「奉其使節之命、觀風西南四道」の二句は、思うに前に見た外務卿井上馨宛の欽差大臣徐承祖の申請書の内容と表裏をなすもので、胡鉄梅が高知訪問の目的を少なくとも表向きには、そのような公式なものとして環堂らに対し表明していたことを窺わせるものである。

さて、最も注目すべきは、言うまでもなく『長笛一声樓詩集』なるものの存在である。「近作を録し」たものと言うが、胡鉄梅の近作とはいつごろからの作品を言うのであろうか。この間の『弥生新聞』に載っている彼の漢詩作品は三作のみで、高知の詩人たちの作品も含めた全体の中の比率はきわめて低く、次稿以降で取り上げる予定の王治本や馬仿周の比率に比べると、大きな開きがある。そこにはもちろん、それぞれの時期の地元紙の編集方針の差異等も勘案する必要があるかもしれないが、いづれにしても、画業を本領とする胡鉄梅は漢詩に関してはさほど多作のタイプではなかつたように思われる。来日後の五年間書き溜めてきた作品を集めたものだけ

たのではなからうか。

胡鉄梅は璞堂に対し「尊序は、獎譽過ぎたること甚だし。愧じて敢えて当たらず。然れども拙作に於いて、光を増すこと十倍なり。清国皇華館小行人胡鉄梅拝読し並びに感を誌す」との謝辞を贈っている(九月五日号)。なお、この詩集が実際に出版されたか否かは確認できていない。

(5) 別れの日が近づいて きて、既望の翌日の二十六日には「弥生新聞」に「胡鉄梅氏 過日来当地に滞在中なる清国の墨客同氏●近々当地を出発して坂府に出で夫より大分県下へ趣かる、由に聞く」との記事が出る。遅くとも十五日ごろから漏らしていた高知退去の気持ちがいよいよ固まってきて、公式な表明となつたのである。「坂府」、すなわち大阪へ行くのは、居を定めていた大阪の東本願寺別院(東本願寺)に戻るのであつただろうが、高知から大分県へ行くには、いったん船で大阪へ引き返す方が便利という事情もあつただろう。なお、胡鉄梅が次の「観風」の地として特に大分を選んだ理由は不明である。

この記事の載つたちようどその日、璞堂は自分より数歳年少の四人の人物を連れて、胡鉄梅の寓齋を訪れている。そのときの作が璞堂の「既望後一日、林勝好・山川良水・日比野政興・松下綱武、与余、同訪胡君鉄梅、寓齋小飲、諸賢皆少余数年」(九月五日号掲載)である。林勝好と山川良水については人物情報が得られないが、日比野政興は「日比野逸亭(一八三九〜)日本画家。本名政起。(中略)画を河田小龍および徳弘董齋に学んだが、のち名草逸峯を師とし(注20)」。松下綱武は「松下鳳兮(一八三九〜一九一八)易学者。名は

綱武、(中略)明治14年赤岡中学校長を最後に教育界を退く。本町において易占を行ない余生を送つた(注20)」。著作に『校本左伝鈔 校正註釈』(明治二十七年)がある。璞堂としては、胡鉄梅の高知退去の日が近づいてきたため、彼への面会のチャンスの後輩たちに与えておこうとの配慮からの訪問だったのだろう。

また、ちようどこのころかと思われるが、璞堂が海浜で手に入れた「榴化石」という石を胡鉄梅に見せ、胡鉄梅はこれに対する賛語(三言詩)を作っている。また、これを承けて璞堂も七律一首を詠んでいる(十月十六日号)。その璞堂の詩の第一句に「節 中元を過ぎて剩暑収まる」とあるので、中元の八月二十四日以後の作ということになる。

さて、八月二十六日に胡鉄梅の高知退去の記事が出たことからすると、やや間延びの感もするが、九月六日の時点でも彼はまだ高知に滞在していたようである。この日、宮地逸齋の招飲の席で胡鉄梅を送別する橋本独酔の詩が残っており、それは左記のようなものである(九月十二日号掲載)。

乙酉、九月六日、宮地逸齋雅兄招飲、送別胡鉄梅先生
橋本独酔

数々把杯君莫辞 数々 杯を把るも 君 辞する莫かれ
孤舟明日又天涯 孤舟 明日 又天涯
他年秋雨蕭々夜 他年 秋雨 蕭々たらん夜
憶否燈前惜別時 憶えたらんや否や 燈前 惜別の時

ところで、期日を特定できる手掛かりがあるわけではないが、詩

題中の「送(別)」の語の共通性により、次の名草逸峯と三浦一竿の作も同日か、それに近いころに詠まれたものではなからうか。

送胡鉄梅先生賦以呈

名草逸峯

客中送客更傷神

客中 客を送りて 更に神を傷む

况是鞆川同派身

況や是れ鞆川同派の身なるをや

促織声嘶秋已(已)老

促織の声嘶れて 秋已に老い

断腸花乱露猶新

断腸の花(秋海棠花) 乱れて 露猶

お新たなり

離亭雨漏南宮秘

離亭 雨は漏らす 南宮(北宋の米

芾)の秘

駅路烟伝北苑真

駅路 烟は伝う 北苑(南唐の董源)

の真

回首江山俱入画

首を回らせば 江山 俱に画に入る

復論六法向何人

復た六法を論ずること 何人におい

てかせん(九月十二日号掲載)

名草逸峯(一八二一〜)は「日本画家。(中略)安芸国加茂郡下

市村(広島県)の出身で、京都で医師を開業していた名草精庵の子として、(中略)紀伊国熊野に移って画に精進する。その後、京都に帰ったが、再び山陰、山陽、九州等を遊歴、また、中国、四国の間を往来、土佐に來国して城下帯屋町に寄留した。幕末から明治前期における土佐の画学生の大部分は、こぞ彼の教えを受けた」といふ。このような経歴に照らせば、第一句にこめられた思いがよく理解できる。逸峯は円山四条派に属し、宮地逸齋や日比野逸亭ら

の師匠格に当たる画家であつた。(注)

一竿の「送胡鉄梅先生 余一竿竹莊句中故友(同前号掲載)」は「高

城唱玉集」五十一丁にも、周防の山口にある王治本を思ふ詩「又得

五律、用『送胡鉄梅』韻」の原作として録されているものである。

中村氏はこれを胡鉄梅の作と勘違いしておられるが、「梅」が胡鉄

梅自らを、「竹」が一竿をそれぞれ意味するという氏の解釈自体は

誤っていない。

何時重握手

何れの時か 重ねて手を握らん

別淚自紛々

別淚 自ら紛々たり (胡鉄梅云一往情深)

对竹君思我

竹に対しては 君 我を思ひ

看梅我憶君

梅を看ては 我 君を憶わん (胡鉄梅云唐六

如慣用此法)

盈虧東海月

盈虧す 東海の月

聚散西山雲

聚散す 万山の雲 (胡鉄梅云鍛鍊不減少陵)

只待秋鴻信

只待たん 秋鴻の信

掀天揭地文

天を掀し地を掲ぐ文 (胡鉄梅云誉之過甚使弟

赧然)

『弥生新聞』所載のこの詩には、右のように一聯ごとくに胡鉄梅の評が括弧の中に記され、最後に「第二韵は、梅竹を以て着想し、貼切にして移らず。若し移して他人に贈らば、則ち泛辞なるを覚えん。盈虧聚散、何等豪放なる。彌下の書生の能く隻字をも遣う所に非ず。胡鉄梅揮掃」との総評が記されている。なお、胡鉄梅がこの詩を「第二韵」と称していることからすると、同号でこの詩の前にある一竿

の「呈胡鉄梅先生」も同じ送別の席上で詠まれたものと見られよう。

他に、天野芳なる人物も「送胡鉄梅先生」と題する詩を作っている（十月十六日号掲載）。これには璞堂が長文の評をつけており、その評によれば、天野芳は「年尚お少き」人で、「頃稿を携えて来り余に問う」たので、読んだという。「此の首能く律体を得たり。鉄梅も亦当に刮目すべし」と評しているところから見ると、胡鉄梅送別の席上で作られたのではなく、胡鉄梅送別を題とする習作であつたのだろう。そして、璞堂の評の日付は「中秋後一日」、すな

わち陽曆の九月二十四日となつてゐるから、そのころまでには胡鉄梅は高知を去つてゐたことが推測される。また、この年の中秋節に「浅井氏の別業、牛渚東湖樓」で開かれた高知地元詩人たちの恒例の詩会（注3）にも、胡鉄梅が招かれて参加した形跡がないから、これも裏づけの一つとならう。

(6) その他 他に、胡鉄梅の「呈三浦一竿先生吟壇正句」（九月十二日号掲載）と璞堂の「読史偶吟百絶抄二」（八月二十一日号掲載）も残つてゐる。

新聞資料を目撃されなかつたとおぼしき中村氏は「王泰園の場合がさうである様に、三兄弟は胡鉄梅を迎へて、借楽公園（城址）に遊んで『戒臨閣』に登り、『迎月亭』、『得月楼』、『松鶴楼』などに小宴を催し、吸江湾に舟を浮べ、桂浜に秋月を賞で、又、それぞれの家に招いて、詩酒飲を尽したことであらう」と想像しておられるが、今回確認できたのは、「松鶴楼」だけだつた。高知の文人たちにとつては初めての清国文人の来訪であり、接待に不慣れなところがあつたのだろう。また、文人のみならず、一般の人士にとつても

めつたにない機会と思われたのだろうか、璞堂の「続唱玉集後序」（『高城唱玉二編集』巻末）によれば、胡鉄梅の高知滞在中は「晨夕乞書画者陸続不絶、無暇唱和」だつたともいふ。

三 高知における胡鉄梅の揮毫

明治十九年に高知を訪れた王治本が小松松月の招飲に応じた際に詠んだ「題鉄梅所作山水図」詩への評において、一竿が「乙酉秋日胡鉄梅 吾が土に来遊し、多く画図を作りぬ」と述べている（『高城唱玉集』二十七丁）。胡鉄梅が高知の文人たちのために揮毫して残した画には、これまでに垣間見てきたもののほかに、どのようなものがあつたのだろうか。整理してみると、左記のようになる。

上記の「山水図」と同日の作として、他に「蘭竹図」と「梅鶴図」があつた。王治本の上述の詩及び「題鉄梅所作蘭竹図」「題鉄梅所作梅鶴図」の二詩（『高城唱玉集』二十六・二十七丁）による。これらの詩が小松松月宅で開かれた宴で詠まれたものであることからして、同家所蔵か。

「梅鶴図」。二十一年、馬仿周が沢村之竹（注3）の招飲に応じた際に詠んだ「題鉄梅所作梅鶴図」詩（『高城唱玉二編集』廿八丁）による。沢村之竹宅所蔵か。

「溪山瀑布図」。璞堂の「秋日間居叠韵」其二の原注に「壁上に胡鉄梅 溪山瀑布を画くの図掛かれり」とある（『江漁晚唱集』附録十八丁）のによる。璞堂宅所蔵か。

「弹琴図」。璞堂に「胡鉄梅画余弹琴図、題詩其上見贈、因次韻答謝、復賦此詩以寄」と題する詩がある（同上二十丁）のによる。

璞堂宅所蔵か。

なお、二十二年の作と見られる一竿の「謝鉄梅惠江山煙雨圖」と題する詩があり（『江漁晚唱集』四十五丁）、胡鉄梅から「江山煙雨圖」の惠送があつたことになる。

以上は画の揮毫である。書の揮毫としては、「聽濤堂」がある。

題箋は「安岡先生雅属 乙酉六月扶桑游人 胡鉄梅居士」。安岡先生は安岡又彦（一八六六—一九〇〇）で、安岡章太郎の祖父（漢名）乙酉六月とあるから、高知へ来て間もないころのものといふことになる。又彦の実兄である日本画家別役春田（一八五五—一九一〇）を介して交流があつたものか。

むすびにかえて

胡鉄梅が高知を去つた後も、高知の文人、とりわけ璞堂以下三兄弟との郵便による詩文交流は明治二十七年ごろまで続いたようだが、その交流の有様は既に中村氏が詳しく紹介しておられる。（注28）

さて、現在まで残っている資料から窺う限り、別後の胡鉄梅との詩文交流に最も熱い気持ちを抱いていたのは一竿であつた。彼の著作『江漁晚唱集』の中の「明治二十六年秋から二十七年三月頃までの詩十数首には鉄梅の評語が記されてゐて、一竿が詩稿の一部を送り、朱批を求めたことが知られる」（注29）し、また、同書の序文も「光緒庚寅仲春」（明治二十三年二月から四月にかけてのころ）に胡鉄梅は執筆している。

そのような胡鉄梅との交流を通じて、一竿の作品は思わぬところで共鳴者を得ることとなつた。それは当時上海に客居していた潘敦

儼（？—一八九六以後）である。彼は日清戦争が勃発する直前の甲午暮春、すなわち明治二十七年四月ごろ、胡鉄梅から『江漁晚唱集』（原稿であろう）を見せられ、跋をしたためることになつた。その跋の中で潘敦儼は「胡君鉄梅 大著を以て見示し、且つ言う（日本）の文物の休明なる、山川の秀麗なる、草木の蕃滋せる、其の清淑の氣を鍾めて、発して文章詩歌と為り、朝野を論ずる無く、通人達士 先後輩出す。而して詩の道は閑退せる者に於いて尤も宜し」とした上で、さらに「余は三浦君と其の面を識らず、未だ其の国に游ばざるも、乃ち其の詩を読むを得て、榮利に淡く、仕進を樂しまざるの徒たり、適たま吾の 時に忤いて黜けられ、寂処するに甘んずる者と、跡 同じからずして心は相印す可きことを知る。浣誦數過、調高く氣厚く、絶えて凡響無く、未だ嘗て其の人と為りを想見せずんばあらず」と記している。

当時、潘敦儼はどのような境遇にあつたのかと言へば、上海で隱居生活に入つて二十年になんなんとするころだつた。そのようになつたいきさつは、『清史稿』列伝一と同二三二の記載を合せて考えてみると、次のようなことであつた。すなわち、同治十三年（一八七五）十二月、穆宗が崩じて徳宗が即位し、翌年（改元して光緒元年。西暦は変わらず一八七五年）の二月に孝哲毅皇后が崩じた。この件につき、山東道監察御史であつた潘敦儼が、光緒二年（一八七六）五月、「歳早に因りて上言し、諡号を更定せんことを請」うた。その趣旨は「后の崩ずるは穆宗升遐の百日内に在り、道路に伝聞し、或いは傷悲 疾を致すと称し、或いは粒を絶ちて生を賞うと云えり。奇節彰らかならずんば、何を以てか在天の靈を慰めん。何を以てか兆民の望に副わん」というものであつたが、時の西太后がその

言を斥けて「謬妄」とし、官職を奪った。そのため、潘敦儼は「酒に帰隠」しているところなのだ。

王治本の記す小伝(『江漁晚唱集』三・四丁)によれば、一竿は「慶応元年 役に京都に従」った後、「国に帰るや 朝廷 功を以て銀を賜ること若干、郷里 之を榮」としたが、同「二年 又藩公に従いて京都に赴き、転じて東京に至りて帰るや、直言を以て官を罷めさせられ、閑居すること三載、水に釣り山に樵し、日に詩歌を以て自ら娛」しんだ。その後(明治に入ってから)「当道 其の才を愛し、復た挙げて戸長と為し、旋た区長と為り、転じて裁判官に任ぜられ、郡長に調遷せられ、奏任官に任ぜられ正八位に叙せらるるも、明治廿五年 議に望して職を廢せられ、二十七年 願に依りて本官を免」じた。このような一竿の官途について王治本は「計るに君 仕途に従事すること殆ど三十餘年、僅かに下吏に浮沈するを得しのみにして、一たびも抱負を展ぶるを獲ず、亦重ねて惜しむ可からざらんや」と述べている。王治本の小伝の執筆は「甲午端陽後一日」(同前書三丁)、すなわち明治二十七年六月九日と見られるので、潘敦儼の見た『江漁晚唱集』の原稿にはまだ記載されていなかったはずだが、思うに一竿の人柄について胡鉄梅も王治本と共通のイメージを抱いており、潘敦儼はそれを胡鉄梅から聞かされ、作品の趣と重ね合わせて、このような内容の跋文を書くことになったのではなからうかと想像されるのである。

高知における日中詩文交流は、この後も璞堂と一竿を日本側の中心人物として続いていく。次稿では明治十九年に下り、「明治期高知における日中文人の交流——旅の詩人王治本を中心として」とい

う題でまとめてみる予定である。

注

- 1 中村忠行「胡鉄梅」札記「清末の一畫家と土佐の詩人達——(『甲南国文』第三十五号、一九八八年)。
- 2 当時の高知の主な地元紙は、その複写資料が高知市立自由民権記念館の資料室に所蔵されている。我々は二〇一〇年三月と四月、その他の郷土資料と併せ閲覧させていただいた。ここに記して謝意を表したい。
- 3 中村氏前掲論文二〇五—二〇六頁。
- 4 林信編輯兼出版『高城唱玉集』(明治二十年三月三日出版御届)開巻第一首の首聯。なお、泰園の「談今懷昔、一往情深(後略)」との評が付されている。
- 5 中村氏前掲論文二〇六頁。
- 6 「幾回」は四月十四日号では「夢魂」に作るが、六月十六日号の「正誤」により改めた。
- 7 なお、『高陽新報』では三首のそれぞれに「海南」と称する人物の評が付せられているが、これは藤野海南(一八五七—一九四四)のことか。
- 8 国分高胤著、木下彪編『青崖詩存』(国分正胤、一九七五年)所収の木下彪の序に拠る。
- 9 蔣海波「明治前期東亜文化交流の一側面——漢詩人水越耕南の交友を中心に」(『関西文化研究叢書12『東アジア三国の文化——受容と融合』、二〇〇九年)六十五—六十六頁。

- 10 蔣海波「近代日中文化交流の足跡を訪ねて——中国画家胡鉄梅と阪神間の文人たち」(『神戸華僑歴史博物館通信』No.5、二〇〇五年)等。
- 11 中村氏前掲論文一九六―二〇五頁。
- 12 中村氏前掲論文二〇五頁。
- 13 中村氏前掲論文二〇六頁。
- 14 中村氏前掲論文二〇七頁。
- 15 『高知県人名事典 新版』刊行委員会編『高知県人名事典 新版』(高知新聞社、一九九九年)三一九頁。
- 16 中村氏前掲論文二〇七頁。
- 17 三浦漁(一竿)『江漁晚唱集』附録(三浦万里、明治四十二年)四十五丁。
- 18 「胡」の字は原資料では「月」と「古」を左右に合した字となっているが、「胡」の誤りであることが明らかなので、改めた。
- 19 「仝」はこの詩の前に掲載されている錦浦の上引の詩を承け、「陰歴」を指す。
- 20 「巫」は「丞」の誤りだろう。そのような明らかな誤植箇所は、後に正しい字をへへに入れて示す。以下同じ。
- 21 この一字は印刷が不鮮明で、判読できず、やむなく●で示した。以下同じ。
- 22 「鐙」の字は原資料では「缶」のような形と「登」を左右に合した字となっているが、「鐙」の誤りであることが明らかなので、改めた。
- 23 林春三郎編輯兼発行、明治二十三年。馬仿周と高知の詩人たちの唱酬詩を中心として編集された漢詩文集。
- 24 寅彦は恩師を回想して、蓑田「先生はK市で一等の旅館延命軒の二階に下宿して居た」と記している(『蓑田先生』、『寺田寅彦全随筆 三』所収、岩波書店、一九九二年)。
- 25 中村氏前掲論文一九八頁。
- 26 ただ、胡鉄梅の実際の来日の時期は、明治十四年四月末から五月末にかけてのころだったと考えられる。『古今詩文詳解』第百三十九集(明治十七年)に胡鉄梅の「辛巳四月遊日本之作」詩が載っているのに拠る。
- 27 中村氏前掲論文二〇一頁。
- 28 当時の高知県の県外との交通事情については高知県編集発行『高知県史』(一九七〇年)八十九―九十一、五二七、五二八頁。
- 29 高知県人名事典編集委員会編『高知県人名事典』(高知市民図書館、一九七一年)三〇一頁。
- 30 『高知県人名事典』三三四頁。
- 31 『高知県人名事典』二六二頁。
- 32 高知県歴史辞典編集委員会編『高知県歴史辞典』(高知市民図書館、一九八〇年)付録三十八、三十九頁。
- 33 「思」の字は『高城唱玉集』では「懷」に作る。
- 34 『弥生新聞』九月三十日号と十月七日号にそのとき詠まれた八人の詩人の作が掲載されている。
- 35 前掲論文二〇八頁。なお、咸臨閣は高知城天守。
- 36 沢村之竹は、名は猶辰。之竹はその号(『江漁晚唱集』附録五十二丁)。
- 37 ホームページ「安岡家の歴史のページ」中の「残された者の

時代に」及び安岡章太郎『流離譚』上・下（新潮社、一九八一年）付録「安岡家系図」に拠る。

中村氏前掲論文二〇九～二二〇頁。中村氏が紹介されていないものを拾えば、二十年から二十一年初めにかけてのころ、胡鉄梅から璞堂あて、馬仿周を紹介する尺牘が来て、璞堂がこれに戯れて贈った詩と、胡鉄梅の尺牘への題詩ぐらいである。それぞれ『高城唱玉二編集』十一丁に載る璞堂の「胡鉄梅寄書中為余兄弟三人説『馬君心事不凡』、因戲賦贈」と「題胡鉄梅尺牘後」。

中村氏前掲論文二一八頁。

柴田清継（しばた・きよつぐ） 本学教授

蔣 海波（シヨウ・カイハ） 本学非常勤講師